

## 9. 三木町とお講(三木町)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅沢, 歩子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4885">http://hdl.handle.net/2297/4885</a>

## 9. 三木町とお講

梅 沢 歩 子

- I はじめに
- II 三木町のお講
- III お講の様子
- IV 三木町のお講の変遷と現状

### I は じ め に

三木町から近い、福井との県境にある吉崎は、蓮如上人が隠れていたことで有名な土地である。北陸は浄土真宗の盛んな地であり、三木町もまた例外ではない。三木町では、住民のほとんどが町内にある浄土真宗大谷派の勝林寺の門徒である。また、勝林寺の門徒は140戸で、そのうち90戸が三木町の家である。寺は門徒によって支えられており、住職・坊守によって管理されている。三木町の勝林寺ではその他、勝林寺世話役が住職を助けて寺院の運営、維持、管理をする。寺の門や塀が傷めば補修工事が必要となるので、趣意書を持って回り、また、お講の取り仕切りとお手伝いをする。さらに、地区の班と同じ班で各班1人ずつ計5人の年当番が毎年持ち回りで決められ、お金集め、お供え、野菜集めをする。

その勝林寺を中心として三木町ではお講が盛んに行われてきた。しかし、現在のお講は以前とは変化しているようであった。そこで、本稿では、IIで三木町で行われている、または行われていたお講をとりあげ、IIIで報恩講と尼お講の様子と、報恩講を支える人々を、そして、IVではお講の変化や三木町の人々とお講とのつながりについて考察していきたい。

### II 三 木 町 の お 講

ここでは、三木町において行われている、または行われていたお講を挙げ、その概要を述べていく。

#### 1. 報恩講

浄土真宗で最大のお講で、浄土真宗の開祖である親鸞上人の追悼法要をする。11月28日が親鸞上人の命日なので、その前後に全国で行われている。別院では1週間程するところもあるが、三木町では、勝林寺において、11月10日の昼、11日の朝、昼、晩と12日の朝に行われる。10日を速夜、11日を中日、12日を満座と呼ぶ。先代住職が亡くなったので、坊守の親にあたる僧侶が住職の代わりをしている。その代わりをしている僧侶と、その他三木町近郊の寺から来る僧侶がお経をあげ、仏教説話をする。11日に“おとき”が、昼には大聖寺、作見、金沢、福井などからくる他地区の門徒に、夜には三木町の門徒にふるまわれる。千葉や大阪にいる門徒の人は、現金書留

でお布施をする人もいるが、報恩講には参加しない。

## 2. 尼お講

女性だけの集まりで、毎月10日の夜におこなっていたが、先代住職が亡くなったので、7年前からは年1～2回勝林寺において行われている。住職の代わりをしている僧侶がお経をあげ、仏教法話をする。その年に亡くなった女性の追悼法要をすることを趣旨として行われる。三木町の門徒のみを対象として行われていたおやじ講、尼お講、若衆講のうちで、残っているのはこの尼お講だけである。

尼お講は、月に1回皆で寄り合ってお参りするの楽しいからという理由で始まった。そして、その当時尼お講に参加していた人の家へ来た嫁が後を継ぐという形式で引き継がれてきた。だから、尼お講に入っている人は、年齢には関係ない。

尼お講の役員は、以前は町内の各班で毎年決められていたが、現在は、都合が悪くならなければやめることはない。その役員が、尼お講の会費300円を毎月集めている。最近では、尼お講が毎月あるわけではなくなったから、集めなくてもいいのではないかという意見もでてきているらしい。尼お講にはいない家の人でも新しく入ることはできるが、そういう人はいない。

## 3. 若衆講

尼お講と同様、娯楽的なものとして始まった。24～25歳ぐらいになるまでの男女を対象にするお講であった。終戦後しばらく続いたが、現在は行われていない。

## 4. おやじ講

尼お講、若衆講と同様、娯楽的なものとして始まった。24～25歳をすぎた男性を対象にするお講であった。このお講も若衆講と同様、終戦後しばらく続いたが、現在は行われていない。

## 5. ウチボンコウ

内仏の報恩講のこと。12月11日～15日間の年末に各家に勝林寺住職の代わりをしている僧侶がまわってきて15～30分お経を読む。その年に法事があった家は、その法事の時に報恩講も一緒にしてもらうので、まわってこないようにしてもらう。1955（昭和30）年頃までは、それとは別に大きい家2～3軒に来てもらっていたので、近所に知らせ、そこに近所の人が集まっていた。お布施は3000円～5000円である。

“おひっちゃ”というお寺の先祖の“ウチボン講”（内報恩講）が11月27日にある。夜、御堂でお経をあげる。親戚の人が呼ばれ、ご馳走がふるまわれる。昔は、おこぶた（つまみ、みかん、湯葉、蒲鉾、お菓子）とおひら、現在は、おひら（ひろうず）、うずら豆、酢の物、おつゆ（小豆汁）などが献立である。

## 6. 組講

浄土真宗大谷派大聖寺教区を東、西、南、北、中、橋立、大聖寺の各組に分け、各組の中に数名づついる東本願寺世話方衆が主催となり、それぞれの組の中で毎月第1日曜日に行われる。三

木町は西組に属し、永井の本村・新村、奥谷、橋、熊坂の庄司谷、北原、畑岡、吉岡、花房、曾宇、直下、日谷、南郷、上河崎、下河崎、大聖寺上福田、畑、畑山、下福田、荻生、上木本村・新村と同じ組に属する。三木町は7月、南郷は1月、と毎年1回順番が回ってくるが、その他の町は3～4町が1つにまとめられ、3～4年に1回、回ってくる。

三木町の順番が回ってきたときには、勝林寺で行われる。他地域では、お寺があるところではお寺で、ないところでは公民館や在家で行われる。

参加者は、三木町で行われるときは、三木町近郊のひとがくる。“ご消息”を読んで子々孫々まで継がれていくことを趣旨として行われている。三木町が属する西組に本山から宛てられた“ご消息”は、1911（明治44）年9月24日に釈彰如から送られたものと、1930（昭和5）年9月24日に釈闍如から送られたものがあり、前者を午前に、後者を午後に読む。組講の進行は、正信偈で始まり、“ご消息”が読まれ、法話をする、の順である。法話の時にお賽銭を200円ずつ出す。組講は以前は一向一揆の土台であり、お講組が一揆の際の組であったといわれる。

#### 7. 示談講

浄土真宗大谷派大聖寺教区の7つの組を毎月1回順番に回って行われる。大聖寺教区の理事会の理事の方が主催となって行われている。各組に回ってくるなかで順番に1つの町に回ってくるので、その町に回ってくるのは何年かに1度になる。三木町の順番が回ってきたときには、勝林寺で行われる。他地域では、お寺があるところではお寺で、ないところでは公民館や在家で行われる。

参加者は、三木町で行われるときは、三木町近郊の人が来る。門徒が仏法について思っていることを話すことを趣旨として行われていたが、現在では、僧侶の説教のみが行われる。ご消息を1つ、組講とは別のものを読む。それは、1898（明治31）年2月22日に釈現如から送られたものである。示談講の進行も、正信偈で始まり、“ご消息”が読まれ、法話をする、の順である。法話の時にお賽銭を200円ずつ出す。

#### 8. 知恩講

大聖寺教区の7つの組にある36か寺のお寺が順番に担当し行われる。大聖寺教区の教務所が主催となって、10月、12月を除く毎月8日にお寺で行われる。各寺に回ってくるのは約3年に1度になる。11月は報恩講のため15日に行われる。

これは僧侶の研修会のようなもので、他の寺の僧侶の説教を午前1人、午後2人聞くことを趣旨として行われる。宿寺になるところは準備に忙しいので、説教をする3人は宿寺でない寺が担当する。門徒も参加できる。知恩講の進行は、正信偈で始まり、“ご消息”が読まれ、法話をする、の順である。法話の時にお賽銭を200円ずつ出す。

### Ⅲ お講の様子

ここでは、三木町のお講の様子を、三木町で行われるお講のなかでも代表的な報恩講と、三木

町の人のみを対象とするおやじ講、尼お講、若衆講のうちで現在も唯一残っている尼お講を例に挙げて述べていく。報恩講は、1996年11月11日（中日）に勝林寺で行われたものを、尼お講は、1996年12月12日に同所で行われたものを挙げる。

表-1 1996年11月11日の  
報恩講の進行

午前10時00分～	報恩講（朝）
	登高座
	文類偈
	念仏+和讃
	回向
	お賽銭集め
	法話
午後0時00分	おとき
1時30分～	報恩講（昼）
	正信偈
	念仏+和讃
	回向
	お賽銭集め
	法話
	改悔批判
午後3時55分	終了
5時00分	おとき
7時00分	報恩講（夜）

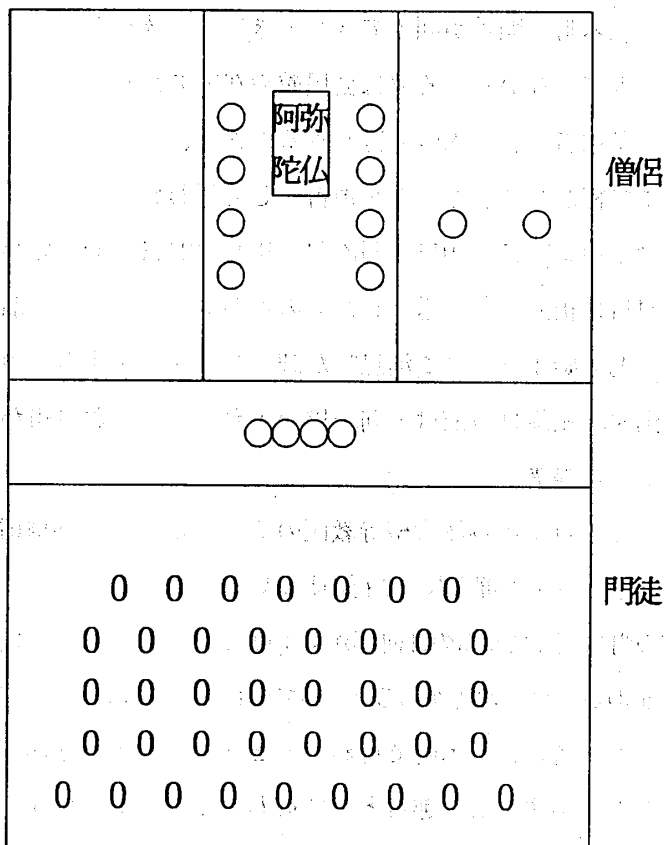
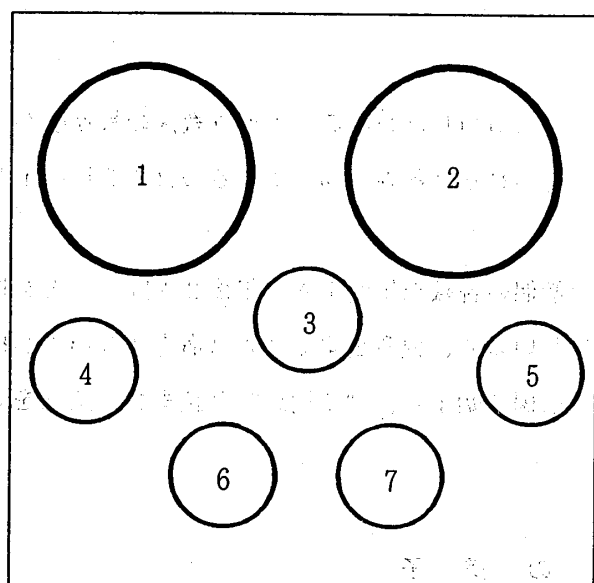


図-1 報恩講の様子



1. ひろうずの煮物
2. 里芋とこんにゃくの煮物
3. うずらまめの煮物
4. 大根と人参の酢の物
5. ずいきの煮物
6. ごはん
7. あずき汁

図-2 おときの内容

## 1. 報恩講

報恩講は午前10時から始まった。お経を読む僧侶は、14人で、勝林寺住職の代わりに僧侶と三木町近郊からくる僧侶で担当する。法話をする僧侶は、その14人とは別の僧侶が担当する。参加者は、男性15人、女性30人程度が集まり、ほとんど70歳前後のお年寄りであった。男性は前のほうに座り、女性は後ろのほうに座っていた。まず、登高座が行われた。このお経の中で、開山する新鸞聖人の苦しみを思い、泣いて読めないところがある。現在では、読むところ、読まないところは形式化されてしまっている。念仏、和讃は交互に読み重ねられ、和讃は「三朝浄土ノ大師」等がよまれた。回向は「願以此功德」がよまれた。僧侶による法話は、楽しい話で、笑いが絶えなかった。参加者は法話を楽しみにしていた様子であった。

正午におときをよばれる。おときで振る舞われるものは、おひら（ひろうずの煮物）、うずら豆の煮物、大根と人参の酢の物、小豆汁（小豆を煮、砂糖、醤油、豆腐をいれたもの）、こんにゃくと里芋の煮物、ずいき（すこという、芋の茎）の煮物、御飯、大根の漬物、バナナ、お菓子、お酒である。おときをよばれることのできるのは1軒に1人である。

午後1時30分から昼の報恩講が始まる。和讃は「五十六億七千万」がよまれる。「改悔批判」は、三木町では今年からの試みである。しかし、このお経を読むことは特別な人しかできないので珍しいことである。能登のほうでは行われているらしい。本来は、報恩講の晩にするものであるが、昼のほうが多くの人々が参りにこられるので昼に行くことにしたそうだ。これは、“ご信心の正しい頂き方”を解くもので、蓮如上人が阿弥陀仏の教えを説いたものである。

## 2. 報恩講を支える人々

報恩講は、1年のうちで最大のお講で、盛大に行われるが、その裏で支える人々がいる。その人達は、門徒であることはいうまでもないが、勝林寺世話役、年当番、そしてお手伝いを頼まれた人達である。

### ① 勝林寺世話役

報恩講での仕事は、準備、後片付け、当日の細かい采配、御明志（3千円～1万円）の受付を町内会の3役をお願いすること、おときの世話を町内の女の人をお願いすること、法話の際のお賽銭の集金、僧侶20人の昼の給仕係（お茶、お酒、食事の世話）を男性のベテラン3人ほどをお願いすることである。

### ② 年当番

お金集め、お供え、野菜集めをする。

### ③ 報恩講でお手伝いをする人

お寺の親戚に当たる人は、報恩講の3～4日前から寺に行き、お掃除をする。さらに、おときを作る手伝いをする。また、尼お講のメンバーから年ごとに持ち回りで役を決め、おとき作りに4、5人出る。さらに、報恩講前に、尼お講に入っている人から尼お講の役員の人がお米（2合）

とお金（300円）を集める。そして、年当番、門徒代表、尼お講からの役の人達で、仏様のお磨き（仏磨き）を11月3日に集まってする。

表-2 1996年12月12日の  
尼お講の進行

午後7時30分～	仏説阿弥陀経 念仏 正信偈 念仏 和讃 回向 お賽銭集め 法話
午後8時40分	甘酒がふるまわれる

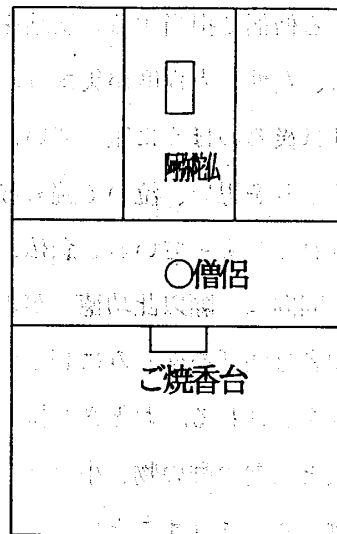


図-3 尼お講の様子

### 3. 尼お講

尼お講は、午後7時30分から始まった。正信偈は参拝者も一緒に読む。同朋奉讃というお教が書いてある本が配られるので、それを見ながら読む。勝林寺住職の代わりをしている僧侶がお経を上げている途中で、皆が順にご焼香していく。左手には数珠を持っている。女性ばかり18人來られていた。70歳前後がほとんどである。法話の後に甘酒がふるまわれ、参加者はしばらくお話をして帰る。

## IV 三木町のお講の変遷と現状

1970年代前半までのと現在のお講では、ずいぶん違ってきている。以前は、報恩講や尼お講では、通路に出店が15軒ほど出て、お御堂や縁側にもあふれるくらい大勢の人でにぎわった。小さい子供も親に連れられてきていた。しかし現在は、お年寄りばかりの少人数が参加、出店も出なくなっている。お講の数も減り、さらに、存続しているお講も簡素化されている。お講に人が集まらない原因は、昔はテレビがなかったからお講が娯楽的要素でもあったということ、仕事を休むいい口実で、大手を降って休める日で楽しみにしていたのに対し、今ではテレビもあるし、専業農家の人が少なくなり、会社勤めで仕事を休めないため参加しにくいのである。さらに、若い人がお講に関心がなくなったということもあげられるが、若い人に限らず、中年層でも「あまりおもしろいと思わないので勧められない」と言う意見があったり、お講の日を間違えて覚えているなどあまり関心がないように思われた。

無くなったお講と残っているお講では、どんな違いがあるのか。おやし講と若衆講は無くなり、尼お講は残っているが、それは宗教離れが進むに従って、女性よりも男性が、年寄りよりも若者

がお講に関心がなくなり、男性や若者を対象とするお講に参加する者も少なくなり、無くなっていったからである。

今後、お講は存続していくと思いますかとの問いに、参加していたお年寄り、楽しみにしていることなので続いて行ってほしいし、続いていくと思うといわれたが、僧侶に同様の質問をすると、このままでは50年もつかもたないぐらいだろうといわれた。さらに彼は、今後のお講はお年寄りばかりになっていくと思うけれど、それを幅広い層にするのが我々の役目で、つまりは企画力が大切になってくるのだといわれた。しかし、企画をしても若い人が聞く機会がないので悪循環が起こっているのだそうだ。このままだと、今の若者はお講に参加する機会もなく過ぎていってしまうので、年寄りになってもお講に参加することはない。つまり、お講がお年寄りばかりになるという年代の問題ではなく、今後お講が存続していくのかという問題である。

私はお講というものを今回の調査実習で初めて知り、お講の現状も知った。確かに、私の周りにはお講のことを話しても「何、それ？」という感じで、私たちの世代ではほとんど知らないことだと思うし、さらに関心がないことなので、悪循環がおこっているというのも分かる気がする。しかし、劇団に入っている僧侶が、劇中に仏教言葉を入れ込み、そこから布教していくという案のように、布教する手段はまだあると思われるし、今後も続いて行ってほしいものである。